

第6回仏教図書館協会研修会 10月11日(木)

## 講演2 「近代における大蔵経の編纂」

京都大学人文科学研究所助手 梶 浦 晋

江戸時代末期から明治初期にかけて、西洋の近代的な金属活字印刷の技術が伝来すると、さまざまな典籍が活字を以て印刷発行されるようになった。仏教典籍もまた、江戸時代末期までは、木版や古活字版や近世活字版と呼ばれる古典的な印刷技術あるいは書写によって流布していたが、明治以降そのほとんどが金属活字印刷に付されようになった。仏教典籍は個々の典籍が単行本として流通するほか、大蔵経のように多数の典籍を集めて流通させる形態があるが、ここでは漢訳大蔵経の刊行を中心に、近代の仏教典籍刊行の歴史を概観することとしたい。

## 近代日本の漢訳大蔵経出版

近代日本においてさまざまな大蔵経や仏教関係の全書類が刊行されたが、そのほとんどがさきに記したように活字印刷や写真製版技術を用いて印刷されたものであった。前近代においては、典籍はごく一部が木版印刷に付される以外ほとんどが書写によっていた。大蔵経もまた、奈良時代より江戸時代初期までは、書写や中国、高麗・李氏朝鮮からの輸入によっていた。

江戸時代のはじめに宗存の発願によりはじめられた木活字版による大蔵経の刊行が本邦最初の刊本大蔵経であるが、残念ながら未完に終わった。その後、時を経ずに天海版大蔵経(木活字版)、鉄眼版大蔵経(木版)と呼ばれる二種の大蔵経が刊行された。天海版は印刷部数も限られ実用に付されることは少なかったが、鉄眼版は木版であり、再印が比較的容易であるため、江戸時代を通じて数多く

印刷され、今日も各地の寺院などに収蔵されているものも少なくない。鉄眼版の流布が江戸時代の仏教学の発展に大きく寄与したことは周知のことである。

明治以降も鉄眼版は印刷しつづけられたが、新たに金属活字で刊行された三種の大蔵経がもっぱら利用されることとなった。以下それぞれの大蔵経の刊行過程やその内容について記すこととする。

## ◎大日本校訂大蔵経(縮蔵)

日本で最初に金属活字を使用した漢訳大蔵経は、『大日本校訂大蔵経』である。この大蔵経は、小型の五号活字を用い、携帯に至便な形態のため『縮刷大蔵経(縮蔵)』と呼ばれている。明治十四年(1881)に出版がはじめられ、同十八年(1885)まで四年の歳月を費やし、菊判線装本40帙419冊が刊行された。

『縮蔵』出版の中心となったのは、もと天台宗本山派修験道大先達であり、明治維新ののち教部省や内務省社寺局などにいた島田蕃根と増上寺の福田行誠であった。島田は廃仏毀釈で疲弊した仏教界の再興などを企図し、人々が容易に大蔵経を閲読できるように、近代的活字印刷による大蔵経の出版事業を思い立った。島田は福田に、増上寺所蔵の大蔵経を底本および校本として使用することををはかり同意を得、弘教書院を興し事業をはじめた。印刷出版の指揮にあたったのはアメリカで印刷技術を学んできた色川誠一であった。弘教書院はこの大規模な事業の経済的困難を解消するために、色川の提言によって当時としては珍しい予約出版の形式で刊行計画をたてた。一部120円・1,000部出版の予定で予約を

募り、仏教各宗派に協力を要請した。このころ各宗派の本山や宗務所の多くは京都にあり、色川が京都へ赴き協力を要請したが、はじめはあまりおもわしくなかったが、東西本願寺が各々500部づつを引受けたのを契機に、事業は軌道に乗ったといわれている。最終的には160円・2,500部という大規模な出版となった。ちなみに西本願寺では明治十九年度の決算に、蔵経代として59,480円61銭9厘を計上しており、これとは別に紙型版費として明治十六年度から十八年度にいたるまで合計55,837円7銭を支出し事業を支援している。

経済的な支援のみならず、編集校正の人材も当然のことながら、多くは仏教各宗派の関係者であった。校正者ははじめ次にあげるような広告を雑誌・新聞などに出したが人を得ず、後には各宗派から人材選抜し任命することとなった。この校正に従事して後に名を成した仏教学者も多い。

#### ○一切経対校者募集広告

本院縮刷一切経対校者今般増員致し候に付、有志の僧衆は至急御照会有之度候也

但し護法篤志者にして、容易に無点の仏典を讀得る者に限るべし、

#### 東京芝公園地第三号 弘教書院

校正の方法は、はじめに高麗蔵を底本に原稿をおこし句読点を切り、その原稿を一人が大声で読み、傍らの三人が各々宋版・元版・黄檗蔵を見て異同のある箇所を声を出し指摘し、その由を即座に原稿に記載するという手順であった。校正者は真摯な態度でこれに臨んだようで、臨濟宗からおくられた校合者に対して示された注意書には、

一、大蔵経対校の儀は最も重任にして、輕易に非ざる旨を体認し、専ら事業の円成を期し、黽勉従事すべきこと

一、能く六和の徳を修め、対校場規則を堅く守るべきこと

一、若し不都合の事故これあるときは啻に吾宗の慚悞のみならず、実に一大盛事の瑕瑾なり宜しく戒慎省慮すべき事

十四年五月 大徳妙心両本山代理 釈薩水とある。

島田は晩年『縮蔵』出版の動機について、江戸時代前期に京都獅師谷法然院の忍激が黄

檗蔵の誤謬を建仁寺所蔵の高麗蔵で対校した事蹟に感動したことや、明治維新以後キリスト教徒が手ごろな大きさのバイブルを布教に利用し多いに成果をあげているのを見て、仏教興隆のために携帯に便利な小型の活字版による大蔵経の出版を思い立たと述懐している。『縮蔵』の出版は、仏教学の発展に寄与したのみならず、廃仏毀釈で活力を失いつつあった仏教界の復興の契機ともなったことは明らかで、島田の『縮蔵』出版の目的は充分達せられたと言えよう。その後中国では宣統三年から民国三年（1911～14）にかけて上海の頻伽精舎で、『縮蔵』のうち日本撰述部を除いた部分を活字を大きくしそのまま出版したが、頭注に記された対校を省いたため学術的価値を損なってしまうている。

『縮蔵』には近代以前の大蔵経と比較していくつかの特徴があるが、その一つに幾種類かの大蔵経を対校したことがあげられる。『縮蔵』は、その本文を芝増上寺所蔵の高麗再雕本を底本とし、同じく増上寺所蔵の宋思溪版・元普寧寺版および弘教書院所蔵の黄檗蔵（一般に明蔵といわれているが明蔵の代わりに黄檗蔵を用いている）を対校本として校合を行い、異同を頭注に記している。また、小型の活字を用いたため携帯にも至便でもあった。ただ小型であることと一段組1行45字であったため閱讀に不便であった。その構成は従来の大蔵経が主として、唐の中期以降、釈智昇撰『開元釋教録』の入蔵録を基準として編成されているのに対し、『縮蔵』は明の釈智旭撰『閱蔵知津』の分類配列を基礎としている。

『縮蔵』は、高麗蔵を底本とし、宋・元・明（黄檗蔵）三大蔵経対校の結果を頭注で記すなど、その内容の斬新さとともに、小型で携帯に至便であることなどによって、各界に受け入れられ、明治時代の仏教学研究の発展に大きな影響を与えるものとなった。近現代の日本における仏教学の発展はこの『縮蔵』の出版が基礎になったといっても過言ではない。

#### ◎日本校訂大蔵経（卍正蔵）

『縮蔵』について刊行されたのは、明治三十五年（1902）から同三十八年（1905）にかけて

刊行された『日本校訂大蔵経』（通称『卍正蔵』）である。これは本願寺派の僧前田慧雲と中野達慧が中心となり京都の蔵経書院から出版されている。この大蔵経は京都法然院の忍激が建仁寺所蔵の高麗再雕本と対校した黄檗蔵を底本とし、四六倍判線装本347冊で、『縮蔵』より大きい四號活字を用い、二段組とし閲読の便をはかるとともに、全てに句読点・訓点を附していることが特徴である。蔵経書院ではこれに引き続き明治三五年から大正元年（1912）にかけて『大日本統蔵経』通称『卍統蔵』751冊を出版した。これは正蔵に収録されなかった中国撰述の典籍を集大成することを企図したもので、章疏類や禪籍などを多数収録しており、中国仏教を研究するうえで貴重な典籍が豊富にあることで知られ、後に編纂された『大正蔵』に収録されていないものも多い。『卍正蔵』が今日ほとんど利用されないのに対し、『卍統蔵』は今日でもその利用価値を失っておらず、この『卍統蔵』が蔵経書院の事業を不朽のものとしている。ただし人材を得なかったのか、正蔵・統蔵とも校訂については必ずしも正確ではないと言われている。近年『新纂大日本統蔵経』として再版されるに際し、旧版出版時に欠巻であった部分について、若干のものについてその後発見された資料で補充するなど少しではあるが改訂が施されている。

蔵経書院はその後中野が主体となり、『真宗全書』『日本大蔵経』などの大型の出版を陸続と行い、大正年間における仏教出版界の隆盛に大いに貢献した。『日本大蔵経』をめぐる村上专精と中野の論争は近代の仏教書出版史上に特筆すべき出来事である。蔵経書院の蔵書の多くは今日京都大学附属図書館に〈蔵経書院文庫・日蔵既刊分・日蔵未刊分〉として所蔵されており、出版に際しての努力の様子をうかがい知ることができる。また『卍統蔵』出版に際しては各宗派・各寺院や諸大学の図書館などから底本の提供があり、底本の種類や出版事業の様子などが同書院発行の『大蔵経報』に記されている。この『卍統蔵』もまた中国において民国九年（1920）に上海商務印書館から覆刻されている。

◎大正新脩大蔵経（大正蔵）

明治時代のはじめに南条文雄・笠原研寿が英国へ留学し、その後、高楠順治郎等がつづいて諸海外へ留学した。やがて彼等が帰国し、明治末年には諸大学において西欧流の近代的仏教学の研究環境が整ってきた。このような環境のなか大正時代になり、新たな大蔵経の出版がはじめられた。高楠順次郎・渡辺海旭を都監として編纂された『大正新脩大蔵経』である。この大蔵経は大正十二年（1923）に「刊行趣旨」が公表され翌十三年五月より毎月1冊づつ刊行され、昭和三年（1928）には正編55冊が完結した。当初の計画では各冊一千頁前後・全五十五巻の予定であったが、のち統編三十巻・図像部十二巻・『昭和法宝総目録』三巻を増加し、昭和九年（1934）に全一百巻が完結した。本大蔵経は『縮蔵』と同じく増上寺所蔵の高麗版大蔵経を底本とし、同寺所蔵の宋・元・明版の三種の大蔵経のほか、宮内庁所蔵の福州東禪寺版・開元寺版大蔵経や、正倉院聖語蔵（元來は東大寺尊勝院の蔵書であった）の天平古写経など多くの校本を用いて編纂されたもので、今日でもその学術的価値を保っている。正編完成時に記された〈刊行経過要略〉によると、『大正蔵』出版は大正十一年（1922）に東京帝大梵文学研究室において高楠を中心とする集まりがあり、大蔵経の出版について議論があったことに端を発したとしている。当時『縮蔵』は一部1,000円以上もし、かつそれも入手が困難であったという。また高楠は前年石山寺で古写経の調査を行ってより、通行の大蔵経と古写経との対校の必要を感じており、それが新たな大蔵経を出版する大きな動機となったのであった。

高楠・渡辺は刊行に際し五大特色として以下のような方針を掲げた。第一は厳密博渉の校訂につとめるため、日本国内の古写経はもとより、敦煌など中央アジアで新たに発見された中国の古写経までもその資料として用い校訂を行う。第二は周到清新な編纂をするため、従来の大蔵経の編成にとらわれず新たな学問の成果を利用し系統だった組織をつくりだす。第三は梵漢対校を行い、最新の研究成果を総合しサンスクリットやパーリ經典を参考に校訂を行う。第四は經典の内容索引・

大蔵経諸刊本の対照表・内外現存の梵本や古写本目録を作成し研究の資とする。第五は携帯の便を考慮しかつ低廉な価格で刊行する。

このため従来線装本の形態で出版されてきた大蔵経を使用しに便利な洋装本としている。(ただし線装本のものも併せて刊行された)

これらの方針は当時の学界のおかれていた状況や出版事情を考慮すれば十二分に達成されたといえよう。『大正蔵』は刊行以来、日本のみならず広く用いられ、昭和三五年(1960)に再版がだされ、近年には装幀を簡易にした普及版も出版されている。再版に際して、誤植など一部の箇所が貼込で訂正が施されているが、訂正箇所が明示されておらず利用に際しては注意を要する。

内容の特色としては、新しい分類の採用があげられる。従来の大蔵経が『開元釈教録』や『閲蔵知津』など伝統的な仏教観に基づいた分類配列をおこなってきたの対し、『大正蔵』では大乘・小乗の区別をとらず、阿含部を首に置く近代仏教学の成果を基礎とした。また宋・元・明版大蔵経等との詳細な対校を脚注で示すとともに、サンスクリットやパーリの名称のほか、底本や対校本の情報、品題や調巻の異同等を記した「勘同目録」を『昭和法宝総目録』におさめたことなどは、仏教研究に有用な情報として今日も重要視されている。また二十世紀初頭に敦煌で発見された多数の古写本などを利用した古逸部の存在も大きな特徴である。

『大正蔵』の出版は高楠・渡辺の二人がその中心人物であったことは言をまたないが、いまひとり大きな力になったのが小野玄妙である。小野は編輯部の責任者の一人として終始『大正蔵』の編輯にたずさわるとともに、全国の寺院の経蔵を調査し、仏教書誌に関する多くの報告書や論文を『ピタカ』や『佛典研究』などに発表している。彼の業績は個々にみると今日では訂正すべき部分も少なくないが、未だその価値を失ってはいないものも多い。特に『佛書解説大辭典』の別巻として出版された『仏教経典総説』は漢訳大蔵経の組織や変遷を記した先駆的著述である。

この『大正蔵』については、底本の選定が適切でない、誤読・誤植が多い、編纂以後に

確認された新出資料に基づく改定や増補の必要性等に関して批判もみうけられる。今日の学問のレベルや出版事情から、『大正蔵』の不備を指摘することは容易であるが、種々の困難な条件のもと出版を完結させたことを思うと、完成より数十年をへても『大正蔵』の改訂や新たな大蔵経の編纂を行ってこなかったことのほうがより重大な問題点と思われる。

明治以来、漢訳大蔵経として『縮蔵』『卍蔵経』『大正蔵』の三種が刊行されたことはすでに記したが、これら以外にも仏教関係の典籍を取めた叢書が相次いで出版された。主要なものとしては、『大日本仏教全書』『日本大蔵経』『仏教大系』のほか『真宗全書』『浄土宗全書』など各宗派ごとの全書類が多数ある。また『国訳大蔵経』や『国訳一切経』など漢訳経典の日本語訳を目指すものも編纂されたが、その多くは漢文を読み下し文にする段階のものがほとんどであった。

このほか明治以降の仏書出版の特色として漢訳以外の大蔵経の出版がある。明治以前においては、日本人にとって仏教典籍といえば、ごく少量の悉曇文献を除いて一般には漢訳経典以外には無かったのであるが、明治以降、南アジアや東南アジア諸国、或いは西藏の言語で記された仏典の研究にも関心がよせられ、これらの言語によって記された仏典も多数もたらされた。その代表的なものとして西藏(チベット)語の大蔵経がある。今日、東洋文庫、東北大学、大谷大学、高野山大学などに多数のチベット仏典が収蔵されているが、これらを研究資料として影印出版することは、早くより望まれたのであるが、大規模なものとしては、昭和三十三年に完成した大谷大学所蔵北京版大蔵経用いた出版がそのはじめである。今日ではデルゲ版など諸版のチベット大蔵経が影印本で或いはマイクロフィルムで利用できるようになっている。

またパーリ語の仏典は南アジアや東南アジア諸国で伝えられきたが、これらを日本語訳したものが『南伝大蔵経』である。

## 大蔵経研究とこれからの大蔵経

大蔵経研究の先駆的業績としては、浄土宗

の僧養鷗徹定の『古経題跋』『古経搜索録』『訳場列位』や、南条文雄『A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka, the sacred canon of the Buddhist in China and Japan, Oxford, 1883』（『大明三蔵聖教目録』）などがある。本格的に大蔵経に関する調査や研究が行われるようになったのは、『正統蔵』や『大正蔵』が編纂される頃からであった。古写経や古版経の調査は明治時代から行われていたが、『大正蔵』編纂時に小野玄妙を中心として各地の古寺社所蔵の典籍が調査された。残念ながらその成果は小野の論文でごく一部が公表されているにすぎない。またこれとは別に東京ではじめられた〈大蔵会〉は仏教典籍に対する関心を喚起するものとして重要な役割をはたし、東京につづき京都・名古屋・三河などでも同様の〈大蔵会〉が執り行われ、京都大蔵会は今日も継続して開催されている。〈大蔵会〉は經典の書写・刊行に功績のあった人々の顕彰とともに、新たな大蔵経編纂の為に、新たな資料の蒐集をも目的とするものであった。〈大蔵会〉の展観目録は、仏教典籍の研究に多くの情報を提供するものとして貴重なものである。大蔵経に関する研究は、『大正蔵』編纂時には比較的多かったのであるが、『大正蔵』完成以後、大蔵経研究は少なくなっていった。戦後、文化財保護の一環として、寺社所蔵文献の調査が行われるようになり、各地の寺社の大蔵経や聖教類の整理・調査の報告書が刊行され、仏教文献の貴重な情報が公開されるようになった。近年、中国で古版の大蔵経の影印本が多数刊行されるなどの状況もあり、大蔵経に関する研究も増加しつつある。

明治以降日本で出版された漢訳大蔵経の編纂と大蔵経研究は上述のごとくであるが、同じく漢訳大蔵経を用いている中国や韓国などでは、どのような大蔵経の編纂がなされたのであろうか。日本においては、中国や韓国にさきがけて大蔵経の出版が行われ、金属活字による出版が中心であったのに対し、中国では宋版や金版など古版の影印が中心となっていることが特徴的である。また日本では二十世紀後半には新たな大蔵経の編纂が行われていないのに対し、近年においても盛んに新た

な大蔵経が出版されていることも大きな特徴である。また朝鮮・韓国では、今日もその板本が海印寺に伝存している高麗版大蔵経（再雕本）の木板刷あるいは、その影印本が中心であることが特徴である。また中国・台湾や韓国において、『大正蔵』の不正な複製本（海賊版）が刊行されていることも注目すべき現象である。これらは各々の国の近代化のありかたや、印刷文化のありかた、版本と写本に関する価値観などによるものであろう。また各国の仏教界がおかれている社会環境や政治環境とも密接な関係があるとおもわれる。

今日、敦煌遺書や日本の古写経のほか、古版の大蔵経に関する資料は、『大正蔵』編纂時に比し飛躍的に増えており、新たな大蔵経を編纂する条件は整いつつあるが、未だ機が熟さないのか、あるいはその必要性がないのか、新たな大蔵経編纂の機運は今のところないようである。今後、新たな漢訳大蔵経編纂の機運が高まれば各国の特色を生かして、協力してことにあたればより正確で学術的価値の高い大蔵経ができるであろう。

近年、仏典のデータベース化が各所で進められているが、その底本はほとんどが『大正蔵』である。今日では『大正蔵』が万全な大蔵経でないことは周知のこととなっているが、データベース化するに際して、この問題が充分には検討されていないのが現状であろう。種々問題があっても『大正蔵』を電子化することは、学界を益すること大なるものがあることは否定できないが、一方、『大正蔵』がもつ問題点を改善せずにそのまま電子化することは学術の発展のために十全なありようとはいえない。社会全体が電子化に向けて移行している現状では、従来のような形態で大蔵経を刊行することは不要となるやもしれないが、これまで蓄積してきた大蔵経に関する様々な知識の利用無くしては、真に利用価値のある大蔵経データベースは生まれるべくもないのではなからうか。

（かじうら すすむ）

---

## 近代編纂諸種大藏經一覽

### 【日本】

#### ◎大日本校訂大藏經（縮藏）〔活字〕

底本 高麗・再雕本大藏經〔増上寺所蔵本〕

対校本 宋・思溪版大藏經〔増上寺所蔵本〕  
元・普寧寺版大藏經〔増上寺所蔵本〕  
黄檗版大藏經〔弘教書院所蔵本〕（一般に明蔵と言われている）

特徴 最初の金属活字（五号活字）による大藏經  
『閲蔵知津』の分類を基礎とした配列  
宋・元・明三本による対校を頭注で示す  
活字を小さくしたことにより携帯に至便であるが、閲読に不便

#### ◎日本校訂大藏經（卍正蔵）〔活字〕

底本 黄檗蔵〔法然院所蔵・麗蔵対校黄檗版大藏經〕

特徴 縮蔵が五号活字であるのに対し、四号活字二段組で訓点を附す  
校訂を頭注で示す  
訓点を附すが、まま誤りがみられるという

#### ◎大日本統蔵經（卍統蔵）〔活字〕

底本 諸種刊本・写本

特徴 従来の大藏經に入蔵されていない仏典を収録  
〈正蔵〉同様訓点を附す  
校訂を頭注で記す  
底本の出自があきらかでないものがある  
原稿となった本は一括して保存

#### ◎大正新脩大藏經〔活字〕

底本 高麗・再雕本大藏經〔増上寺所蔵本〕

対校本 宋・思溪版大藏經〔増上寺所蔵本〕

元・普寧寺版大藏經〔増上寺所蔵本〕  
明・嘉興大藏經〔増上寺通元院所蔵本〕

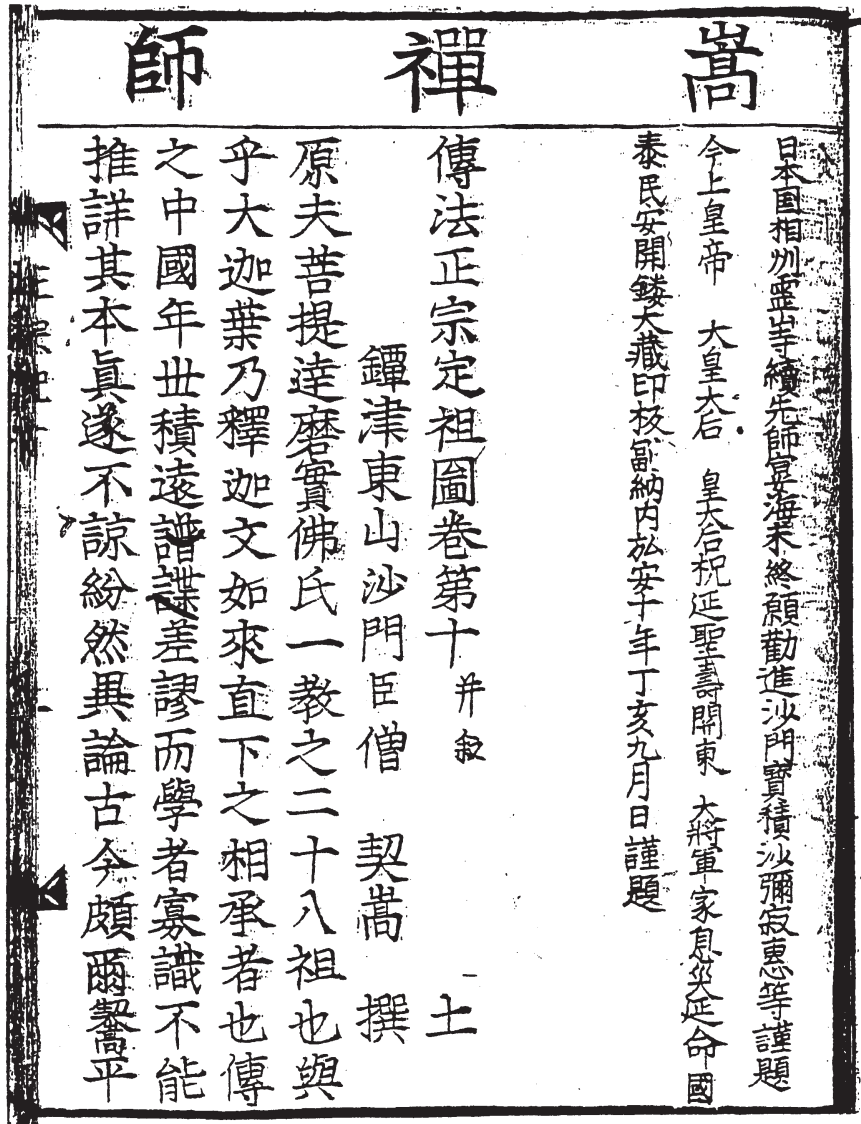
宋・福州東禪寺・開元寺版大藏經〔宮内省図書寮所蔵本〕

高麗・再雕本大藏經〔金剛峯寺所蔵本〕  
聖語蔵古写本〔宮内省図書寮所蔵本〕

その他諸種刊本・写本

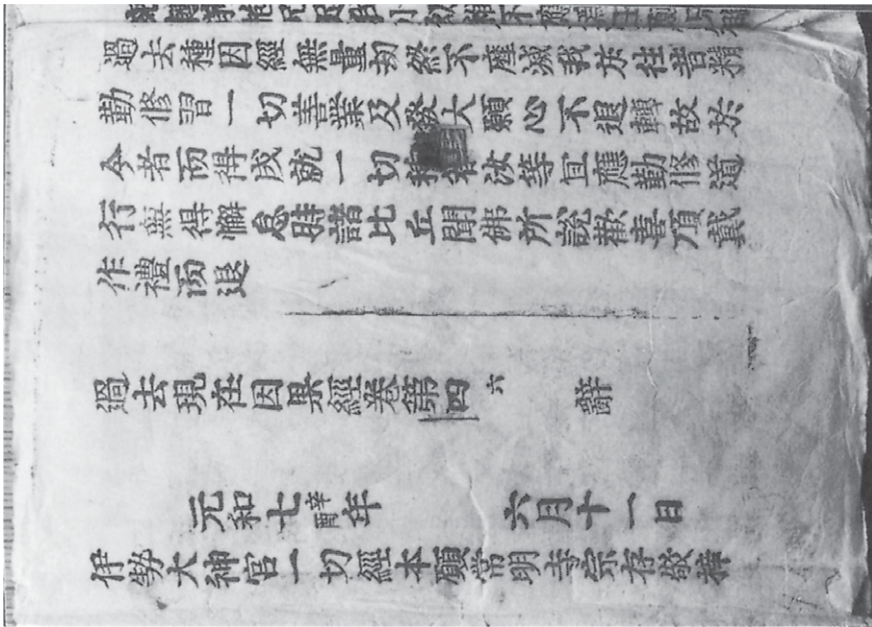
特徴 配列を独自のものにする（大小乗の区別をなくす等）  
諸本の校異を脚注で記す  
敦煌遺書などの古逸經典や偽疑經典等を収録  
図像部を附す  
洋装本で最初に完結した大藏經

日本近世の大蔵経出版について



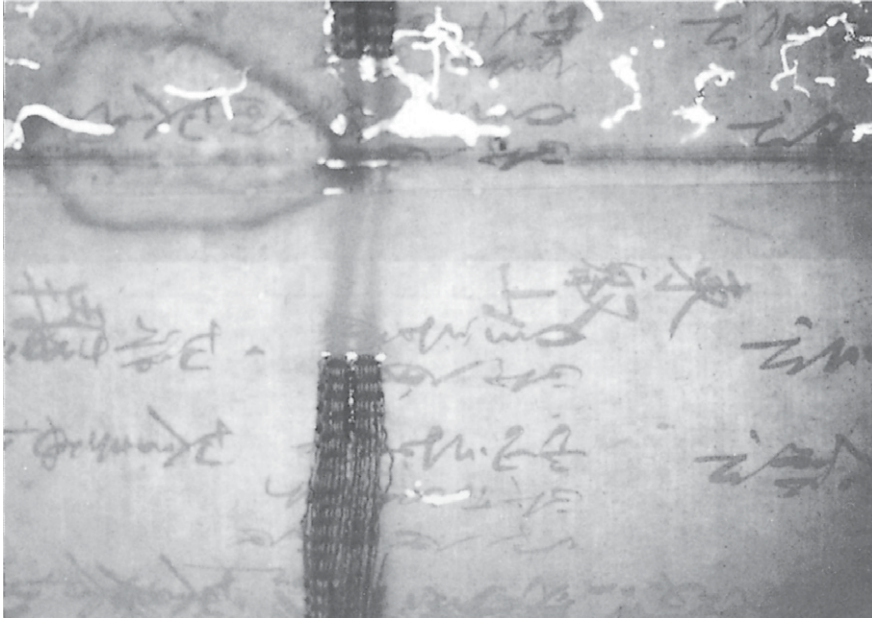
[[伝法正宗記] 第十卷頭。覆刻本であり、その版木は黄檗版として使われる。法然院黄檗版の内]

図版 1



「毘沙門堂天海版 155<從>帙の帙紙」

図版 2



「毘沙門堂天海版 121<意>帙の帙紙」

図版 3



最函五卷  
○新刊印行目錄五卷

日本武洲江戸東叡山寛永寺一切經新刊  
印行目錄卷第五

部數一千四百五十三部  
卷數六千三百二十三卷  
函數六百六十五

寛永十四丁丑三月十七日始刊行之到  
慶安元戊子三月十七日經歷十二年而  
終其功焉

奉彫造 佛說一切經藏

今上皇帝 玉體安穩  
東照權現 倍增威光

四海泰平 國家豐饒  
佛法紹隆 利益無窮

征夷大將軍左大臣源家光吉祥如意

日本武洲江戸東叡山寛永寺

山門三院執行探題前毘沙門堂門跡慈眼大師  
天海願主

慶安元戊子曆三月十七日

經館分藏林氏倅肅花輪居士  
使刻刷印而印行之

「毘沙門堂天海版 250 <最>帙の目錄第5卷末」

図版 4

種種花以為供養空中有聲而作是言善哉善哉大  
虛空藏菩薩摩訶薩乃能作此廣大佛事乃至於此  
大集法要殊勝莊嚴亦能攝受未來有情莊嚴正法  
令彼不失菩提之心於此經中受持讀誦書寫解說  
爾時世尊為欲屬累此經典故以神通力即從身中  
放大光明遍照十方無量佛刹悉皆振動有無量阿  
僧祇有情發阿耨多羅三藐三菩提心無量有情得  
無生法忍復有無量有情心得解脫復有無量有情  
得法眼淨復有無量有情離諸貪染復有無量有情  
得於人天福德勝因當得見佛一切大眾皆生隨喜

經 大集大虛空藏菩薩所聞經卷八 六

佛說是經已時大虛空藏菩薩摩訶薩具壽大迦葉  
波具壽阿難陀娑訶世界主大梵天王釋提桓因四  
大天王諸苾芻衆及大菩薩天人阿脩羅乾闥婆等  
一切衆會聞佛所說皆大歡喜信受奉行

大集大虛空藏菩薩所聞經卷第八

丙午歲高麗國大藏都監奉 勅雕造

「黃葉版淨嚴要請秘密儀規の内、大集大虛空藏菩薩所聞經第八卷末」

図版 5





新纂大日本統藏經 (一九八〇、八九)

影印北京版西藏大藏經 (一九五八、六二)

【大日本仏教全書】 【鈴木財団版】  
【日本大藏經】 【鈴木財団版】 (一九七三)  
(一九七三、七四、七五、七六、七七)

【新国訳大藏經】 (一九九三)

高麗再雕本大藏經 (韓国) (影印) (九五七、七六)  
高麗再雕本大藏經 (韓国) (木版刷) (九五八、六二)  
ハングル大藏經 (韓国) (一九六五)  
精訂中華大藏經 (台湾) (影印) (一九七四)

仏教大藏經・總藏 (影印・活字) (台湾) (一九七八、八四)

仏光大藏經 (台湾) (一九八三)  
中華大藏經 (漢文部分) (中国) (一九八四)  
文殊大藏經 (台湾) (影印) (一九八六)  
房山石経 (遼金部分) (中国) (影印) (一九八六、九三)  
龍藏 (中国) (木版刷) (一九八九)  
龍藏 (台湾) (影印) (一九九〇、九二)

房山石経 (中国) (影印) (二〇〇〇)

【黄業繼眼版一切経目録】 黄業繼眼版一切経印行会 編 (一九五三)  
【中興寺経藏宋版大藏経目録】 中村利之進 編 (一九五三)

【色定法師一筆書写一切経目録】 竹内理三 編 (一九五七)

【高麗版一切経目録】 高野山文化財保存会 編 (一九六四)  
【大藏経一成立と変遷】 大藏会 編 (一九六四)

【大谷大学図書館第二和漢書分類目録】 (第一分冊) 大谷大学図書館 編 (一九六七)  
【尾張史料七寺一切経目録】 七寺一切経保存会 編 (一九六八)  
【長瀬寺宋版一切経目録】 文化財保護委員会 編 (一九六七)  
【喜多院宋版一切経目録】 喜多院 編 (一九六九)

【石山寺の研究 一切経篇】 石山寺文化財総合調査団 編 (一九七八)

【本源寺藏宋版一切経(三型寺旧藏)目録】 小島惠昭等 編 (一九七九)

【宋版一切経目録】 総本山長谷寺文化財等保存調査委員会 編 (一九七九)

【名取新宮寺一切経調査報告書】 東北歴史資料館 編 (一九八〇)

【北野経王堂一切経目録】 文化廳 編 (一九八二)  
【大藏会展覧目録(復刻) 一自第一回至第五十回】 大藏会 編 (一九八二)

【増上寺三大藏経目録】 増上寺史料編纂所 編 (一九八二)

【明代以降における藏経の刊刻】 長谷部尚彦 著  
【愛知学院大学論叢一般教育】 三〇・三一・三二・三三・三四・三五・三六・三七・三八・三九・四〇・四一・四二 (一九八三、八四)

【大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書】 元興寺文化財研究所 編 (一九八四)

【彌谷法然院所蔵藏対校黄業繼版大藏経並新撰入藏経目録】 仏教大学仏教文化研究所 編 (一九八九)

【快友寺一切経調査報告書】 山口県教育委員会 編 (一九九三)

【大藏経関係研究文献目録】 野次佳美 編 (一九九三)

【大藏経関係研究文献目録・補遺・追加】 野次佳美 編 (一九九七)

【京都妙蓮寺藏松尾社一切経調査報告書】 中尾秀 編 (一九九七)

【神奈川県立金沢文庫保存本版一切経目録】 神奈川県立金沢文庫 編 (一九九八)

【西大寺所蔵元版一切経調査報告書】 奈良県教育委員会 編 (一九九八)

【興聖寺一切経調査報告書】 京都府教育委員会 編 (一九九八)

【影印東叡山寛永寺天海版一切経目録】 松永知海 編 (一九九九)

【東叡山寛永寺天海版一切経目録】 松永知海 編 (一九九九)

【延暦寺木活字関係資料調査報告書】 滋賀県教育委員会 編 (二〇〇〇)

近代編纂大藏経関係年表

日 本 (漢 訳)	日 本 (漢 訳 以 外)	中 国 ・ 朝 鮮 半 島	日 本 以 外 の 主 要 な 大 藏 経 研 究 ・ 調 査 ・ 目 録 ・ 関 連 事 業 等
大日本校訂大藏経(縮刷) (一八八〇〜八五)			養鶴徹定「古経略」『古経撰要録』「訳場列位」 『大明三藏聖教目録(訳補)』南條文雄 訳補 (一八八三)
日本校訂大藏経(改正藏) (一九〇一〜〇五) 大日本統藏経(正統藏) (一九〇五〜二二)	大日本仏教全書 (一九二二〜三三) 日本大藏経 (一九二四〜三三) 国訳大藏経 (一九二七〜三三) 仏教大系 (一九二八〜三三)	高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一八九九) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一八九九) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一九一五)	『大藏経解説』 常盤大定 著 『一切経の由来』 村上專精 著 (一九一五) 第一回東京大藏会 (一九一五) 第一回京都大藏会 (一九一六)
(博文閣) 縮刷大藏経(未完) (一九一一〜一四) 大正新脩大藏経 (一九二四〜三四)	大日本仏教全書 (一九二二〜三三) 日本大藏経 (一九二四〜三三) 国訳大藏経 (一九二七〜三三) 仏教大系 (一九二八〜三三)	頻伽精舎校刊大藏経【清】(活字) (一九一一〜一三) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一九一五)	『大藏経解説』 光寿会 編 (一九二二) 『仏教聖典概説』 深浦正文 著 (一九二四) 『昭和法要目録』 高橋順次郎等 編 (一九二九〜三四) 『大藏経沿革』 藤堂祐範 著 『浄土宗字譜』 『高野山見存藏経目録』 水原亮栄 編 (一九三二) 『仏書解説大辞典』 小野玄妙 編 (一九三三〜三六) 第一回名古屋大藏会 (一九三三) 第一回三河大藏会 (一九三四)
	国訳一切経 (一九二八〜) 昭和新纂国訳大藏経 (一九二八〜三三) 南伝大藏経 (一九三五〜四)	影印磔砂版大藏経【民国】(影印) (一九三三〜三六) 影印宋藏遺珍【民国】(影印) (一九三五) 龍藏【民国】(一九三六) (木版刷) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一九三七)	『吾国現存古版大藏経』 朝日遺雄 編 『ピタカ』 第九年九号 (一九四〇)
		普慧藏【民国】 (一九四六?)	